

初期歴史時代の北インドにおける都市文化の諸相

A Note on the Urbanisation in North India

上杉 彰紀

UESUGI Akinori

Kansai University

In this paper, the author attempts to clarify the problems and perspectives which are related to the urbanization in North India during Early Historic Period. Assuming that the process of urbanization was a kind of social transformation entailing numerous changes in various spheres of society, discussions are made on various aspect of material culture of the period of urbanization. City, house, life-style, manufacture, trade, etc. are dealt with in this paper.

1 はじめに

本稿では初期歴史時代の北インドにおける都市について、諸々の要素から問題点を整理し、今後の研究の方向性を模索してみたい。ここで扱う時間幅は、前2千年紀後半の精製土器の出現から後1千年紀中葉のいわゆるグプタ朝併行段階までの2000年近くに及ぶ時代である。ここでは、拙稿 [上杉1994] において示した土器編年を北インド都市文化時期区分 (北インドⅠ～Ⅵ期) として設定したものをを用いる¹⁾ (表1)。この時期区分に従うと、北インドにおける都市の成立は北インドⅢ期 (前6～4世紀頃) に想定できるが [上杉1998]、それに先行する北インドⅠ・Ⅱ期には都市形成に向かう社会変革である都市化が開始・進行していたと考えられることから、この時期をも検討の対象とする。

本稿では、1) 都市そのもの、2) 都市を中心とする一つの地域、3) 複数の地域間、4) 「北インド」という一つの社会・文化的地域単位、という4つのレベルで都市の果たした役割について考えることにしたい。さらに、都市を取り巻く社会的な状況についても検討を加える。

2 都市を構成する要素

まず、都市という空間の内部のあり方から検討を加えることにしたい。ここで検討するのは、都市内部の区画、都市空間を画する城壁、住居およびそこで展開した生活行為である。

都市内部の区画

まず、文献史料の研究 [山崎1987] によると、都市内部は大道 (mahāpatha) をはじめとする街路によって区画され、諸々の建物が配置されていたらしい。また、王宮や工人居住区、あ

表1 北インド編年表

(表上段の数字は以下の通り。1 = ガンジス上流域, 2 = ガンジス上・中流域, 3 = ガンジス中流域, 4 = ガンジス中・下流域, 5 = ヒマラーヤ山脈南麓)

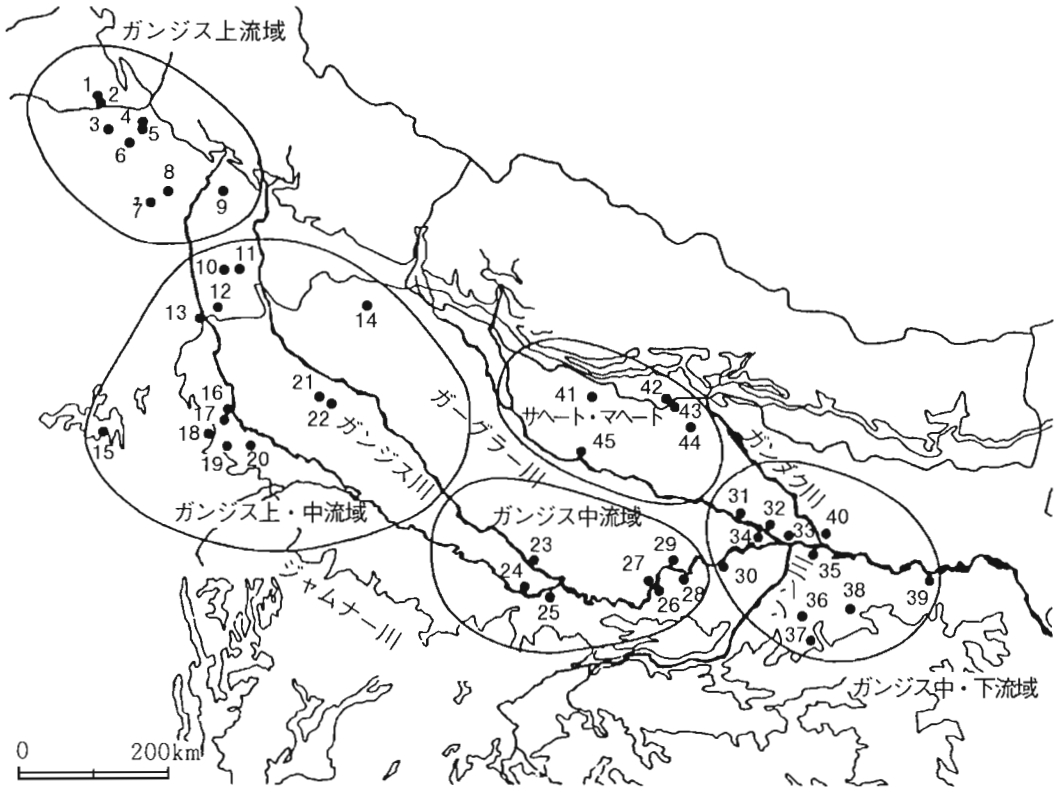
北インド編年		1	2	3	4	5
	VII期	ポスト・グプタ朝併行段階				
500AD	VI期	グプタ朝併行段階				
	V期	クシャーン朝併行段階				
AD	IV期	NBPW後期				
	III期	PGW後期		NBPW前期		
500BC	II期			BRW・BSW後期		
	I期	PGW前期	BRW・BSW前期			(金石併用期)
			断絶			
1500BC		後期ハラッパー文化	OCP	?	新石器文化 (BRW)	?

略号：OCP = 赭色土器、BRW = 黒縁赤色土器、PGW = 彩文灰色土器、BSW = 黒色スリップがけ土器、NBPW = 北方黒色磨研土器

るいは商人居住区など、性格の異なる階層・職能集団の居住区が分けて配置されていたとされる²⁾。また、カウティリヤ『アルタシャーストラ』[上村1984]によると、各居住区は方位にしたがって配置されており、各居住区に守護神が置かれていたという。工人や商人にはさまざまな業種が含まれており、加えて娯楽や諸々の労働に従事する人々も都市内部の居住者を構成したという³⁾。このことから、都市内部はその居住者の性格ごとに区分けされ、都市空間の計画性に対して管理が介在していたことが理解できる。

都市内部の空間利用に関して、考古学による調査・研究によって明らかにされている部分は、現状ではわずかである。城門の位置についてはある程度の推定が城壁の地形的特徴から推定されているが、その内部の区画については、街路の配置とともに、ほとんど明らかにされて

いない。その中で、北インド型の都市とはその構造を異にしているが、面的に調査が実施されているタキシラー遺跡群では、街路と居住区との関係がある程度判明する。ビル・マウンドでは、直線的に延びる幅7mの主要街路をはさんで、住居が雑然と不規則に配置されている。部屋空間は密集形態をとり、平面形態にみる限り、建物各個の独立性は低い。一方、ギリシア型の都市計画が実施されたシルカップでは、主要街路と直交して延びる街路が基盤目状に住居域を区画しており、整然とした計画を示している。



- | | | |
|-----------------|-------------------|----------------------|
| 1. ナガルの遺跡 | 17. ソーク遺跡 | 33. チランド遺跡 |
| 2. カトバロン遺跡 | 18. ノー遺跡 | 34. カイラディ遺跡 |
| 3. ダーデリー遺跡 | 19. ファテール・シークリー遺跡 | 35. パータリプトラ遺跡 |
| 4. ルーパル遺跡 | 20. バーテシュヴァラ遺跡 | 36. ソーンプル遺跡 |
| 5. バーラー遺跡 | 21. ジャーカーラー遺跡 | 37. タラディー遺跡 |
| 6. サンゴール遺跡 | 22. アトランジーケラ遺跡 | 38. チャンパー遺跡 |
| 7. バグワンプラ遺跡 | 23. シュリンガヴェーラブラ遺跡 | 40. ヴァシャーリー遺跡 |
| 8. ダウラトプル遺跡 | 24. カウシャンビー遺跡 | 41. サハート・マハート遺跡 |
| 9. フラース遺跡 | 25. ビーター遺跡 | 42. ティラウラー・コート遺跡 |
| 10. アーラムギールプル遺跡 | 26. サラーイ・マーハナ遺跡 | 43. ピブラフワー＝ガーンヴェリア遺跡 |
| 11. ハステイナーブラ遺跡 | 27. ラージガート遺跡 | 44. ソーガウラ遺跡 |
| 12. アッラーフプル遺跡 | 28. ブラフロードプル遺跡 | 45. アヨーディヤー遺跡 |
| 13. プラーナ・キラー遺跡 | 29. マサーオン遺跡 | |
| 14. アヒッチャトラー遺跡 | 30. バックサル遺跡 | |
| 15. ジョードプル遺跡 | 31. ナルハーン遺跡 | |
| 16. マトウラー遺跡 | 32. マーンジー遺跡 | |

第1図 北インド遺跡分布図

北インドでは、タキシラー遺跡群の例と比較しうる調査例はないが、いずれの遺跡においても建物の主軸は磁北に近く、経年的にほとんど主軸方向に変化にみられないことや、ソーク遺跡のように同時期の建物が街路と組み合わさって配置されている例が存在していることから、何らかの計画性が存在していたことが類推できる。しかし、その計画性は整然とした格子状の街路によって区画されるものではないようである。

時系列における煉瓦積建物の重複関係をみると、同一平面形態で数次に及ぶ建替えがみられる場合と、平面形態が一新される場合とがある。前者は建替えにあたって平面形態の踏襲性が重視されたことを示すものであり、後者は何らかの事由によって建物にかかわる空間利用のあり方が変更されたことを示している。平面形態の変更は建物配置の変更とかかわっている可能性が高く、都市内部の空間利用の変化の一端を示すものとして重視される。都市の発展・衰退とこうした建物の平面形態の変化がいかに関連しているのか明らかにすることは、都市内部における空間利用のあり方を考える上で一つの手掛りとなろう。

城壁

山崎元一氏の文献史料の検討 [1987: 160] によると、都市の構造に関する文献史料の記述では、都市は城壁 (pākāra, uddāpa) と壕 (parikhā, udakaparikhā) によって囲まれる方形もしくは矩形を呈し、城門 (dvāra, gopura, toraṇa) や防御用の小屋 (koṭṭhaka)、望楼 (aṭṭālaka) が設けられていたという。城門には門衛 (dovārika) が常駐し、人の出入りを管理していた。このことは、都市空間を城壁によって周囲から分離し、その内外の差を明確化しようとする意識が働いていたことを示唆している。

実際の遺跡において望楼が確認された例はないが、上に検討してきたように、城壁は北インドの都市遺跡に通有の施設であり、またマヘート遺跡カード・バーリー門の調査では3重の門衛施設を伴う城門施設が検出されており、文献史料の記述と共通している。文献史料と考古資料の双方を勘案すると、都市の外部構造に対する当時の人々の間にはある程度の共通認識が形成され、都市の外部構造の定型化を志向する傾向が存在した状況が想定できそうである。

サーンチーの浮彫例には都市城壁を描いた場面が存在する (図2)。城門から馬車に乗った王侯が出城する場面に関連しており、城門と城壁の構造をうかがうことができる。城壁から見るとそれは煉瓦積もしくは切石積で、上端にピラミッド形を連続的に配した構造を持つ。城門は木造と考えられ、左右一対の張り出しを持つ。それぞれ中ほどに小さな窓を有し、上部に一つずつのバルコニーを載せる。バルコニーは頂華を冠したチャイティヤ・アーチを持ち、門の方向に直交して載るチャイティヤ・アーチ型の長屋根を有する。このバルコニーは城門を出入りする人の管理をするための衛所となっていたと考えられる。両側の張り出しの間が通路になっており、馬車に乗って出城する人々の姿が描かれる。基本的にサーンチーではこのような形態的構造を持つ城門・城壁が一貫して描かれており、少なくともサーンチーのストゥーパ造



図2 サーンチー第1ストゥーパ塔門彫刻にみる城門の風景

営にかかわった彫工たちによって認識される城門・城壁の構造は、このような形態をとっていたのであろう。それはとりもなおさず、サーンチー周辺に住む人々もしくはこの地を訪れる人々にとって一般的な構造であった可能性が高い。

城門構造については判然としないが、少なくとも城壁に関しては、煉瓦積もしくは石積による城壁構築は、ラージギル遺跡旧・新城の石積例を除いて知られず、北インド諸都市の城壁の構造をどこまで反映したものであるのか明らかでない。サーンチーに比較的近い中央インドの中核都市ウッジヤインにおいても城壁は盛土によるものであり、サーンチー浮彫例の城壁構築方法の実際上の存否を確認し

得ない。あるいは理念型としての城壁の描写とも考えられるが、いずれにその発想の原点を得たのかについても明らかでない。

ところで、カウティリヤ『アルタシャーストラ』には、都市の建設に関して、その種類や立地、あるいはその構造について規定する記載がみられる⁴⁾。そこでは城砦として、排水渠を備えた3重の濠とその濠を掘削した際の土によって構築される土塁の必要性を説いている。土塁の上には煉瓦積もしくは石積の胸壁が築かれ、さらに小塔や望楼、矢狭間を設けた露台などの防御施設が必要とされる。加えて、象の侵入を遮断するための棒や吊り上げ式の橋をともなう城門、武器を保管するための溝について言及される。

現状で都市遺跡と認定される遺跡は城壁(土塁)を持つものが多く、都市遺跡の特徴として認識されているが、大規模な城壁の存在が都市遺跡認定の根拠となっている場合も少なくないことから、実際としては、城壁が存在しない都市遺跡が存在した可能性をまったく否定することは困難である。例えば、商業都市として発展したとされるヴァツツァ国の都ヴァイシャーリーは、現在のビハール州ヴァイシャーリー県バサルに所在する遺跡に比定されているが、この遺跡では遺跡空間を囲繞するような城壁は存在しておらず、広い範囲内に居住空間・仏教寺院空間が点在して遺跡が構成されている [Sinha & Roy 1969]。『マハーバーラタ』に登場するハスティナーブラの都でもまた城壁は確認されておらず、居住活動の繰り返しとしてのマウンドが残るのみである [Lal 1954]。

しかしながら、北インドの多くの都市遺跡が城壁を有する事実を評価すれば、北インド各地に都市が発展する過程において、多くの都市で城壁の造営を促進する歴史的・社会的事情が存在したことがうかがわれ、歴史的・社会的脈絡の中に都市構造を構成する一つの要素として城壁の造営を位置づけることができる。また、城壁を持たないが、都市遺跡としての可能性を強く示唆するものについても、そうした歴史的・社会的脈絡の中で、なぜこの都市が城壁を持つにいたらなかったかを考える必要がある。

北インド初期歴史時代の都市においては、少なくとも城壁によって圍繞されるようになった段階においては、インダス文明の都市遺跡にみられる城塞部と市街地という分離は認められない。都市空間全体が一つの城壁によって囲まれており、その内部を区画し、都市設計を実施した蓋然性は高いものの、平面構造上は一つの領域内に都市空間が形成されている。

城壁によって囲まれる都市空間の平面形は定型化した様相をみせておらず、むしろ都市が立地する地形にしたがって城壁がつけられている。例えばマヘート遺跡の場合では、円弧を描くラプティ川（古代名アチラーヴァティ川）の河道に沿うようにして、城壁は湾曲する。また、ラージギル遺跡の場合、旧城では内城壁は丘陵によって囲まれた平坦地を占めるように不整形にめぐらされ、外城壁は丘陵の尾根を利用して構築されている。カウシャーンビー、マトウラー、アヒッチャトラーの諸遺跡では、そうした自然地形との関係は判然としないものの、それぞれ略矩形、長楕円形、三角形を呈しており、各遺跡に一貫する城壁の平面形態は認められない⁹⁾。このように、城壁によって都市空間を区画するという意識は都市間で共通していたものの、その平面形態を規制するまでの都市形態に対する共通理念は存在しなかったと考えざるを得ず、各都市の発展過程に生じた何らかの事情によって、城壁の平面形態が決定されたと推定できる。

次に、城壁の断面構造について、実際の例を取り上げながらみていくことにしよう。城壁の断割り調査の成果によると、そこには各都市間で程度共通した構築のあり方が看取できる。ラージギル新城 [IAR 1961-62]、マヘート [Sinha 1967; Aboshi *et al.* in press]、マトウラー [IAR 1973-74・74-75・75-76・76-77]、アヒッチャトラー [IAR 1963-64・64-65]、ラージガート [Narain & Roy 1976] などの北インド諸遺跡に加えて、シシュパールガル [Lal 1949]、ウツジャイン [IAR 1955-56・56-57・57-58] といった北インド外の周辺地域の遺跡においても、城壁の中核をなす部分は土を盛って構築されており、その後の発展過程の中でさらなる盛土による積み足し・補強や煉瓦積の擁壁を頂部に載せるなどの追加・改変が行われている。また、ラージギル新城、マヘート、ウツジャインなどの諸例では、城壁の外側に接して大きく掘り込まれた濠（壕）が検出されており、おそらくは城壁の構築に供する土の調達とあわせて、城壁の持つ防御効果を高めることを目的として、城壁とともに一体化してつくられたものと考えられる。

城壁の断面形については、北インドの諸例では蒲鋒形もしくはその裾部の傾斜が緩やかな形

態を呈する場合が一般的である^{6・7)}。カウシャーンビー遺跡では、北インド都市遺跡の城壁の代表例としてしばしば引用されてきた、煉瓦積の擁壁を表面に設けた構造が確認されている⁸⁾ [Sharma 1960・69]。しかし、北インドで城壁の外面に煉瓦を積む例はカウシャーンビー遺跡のみであり、一般的な城壁の築造方法ではなかったと考えられる。

北インドの都市遺跡における城壁の造営時期は北インドIII・IV期（前1千年紀後半）、とりわけ北インドIV期（前1千年紀後葉）に集中している [上杉1998]。城壁の役割にまず想定される防御機能、さらには都市空間を周辺から分離するための機能の2つの要素が考えられ、前者の立場からは城壁造営期における戦闘もしくは戦争の頻発化とそれに対する防御意識が、また後者の立場からは都市空間の限定に付随する社会空間の隔絶化に対する都市社会の意識が導き出されよう。都市を取り巻く戦闘もしくは戦争の存在に関しては、確かにマヘート遺跡では投弾状の土製品が城壁周辺で出土するなど、城壁に関連して防御意識が存在した可能性を強く示唆するが、城壁の断割り調査では、少なくとも大規模な戦闘行為を示唆する証拠・痕跡はなく、都市の内外において戦闘・戦争がどの程度行われたのか、断定する手掛りを持たない。

一方、都市空間の区画という考え方については、これもまた想像的解釈の範囲を越えるものではないが、都市に周辺地域とは隔絶したモニュメント的存在を誇示しようとする性格を想定するならば、多量の労働力を集約的に投入する城壁の造営は、都市内外の住民の都市に対する意識に大きく影響することは想像に難くない。そうした城壁という大規模施設によって都市空間を区画することは、都市と周辺地域の隔絶性を顕在化させるものであると考えられ、都市が発展・成熟するなかで、北インド社会通有の観念として、都市における城壁の造営が不可欠なものとして定着した可能性は充分にあらう。

住居

都市内部につくられ、都市住民の生活の場となった住居についてみてみることにしよう。

山崎元一氏の研究 [1987: 161-62] によると、仏典に記された在家信者が自己のために建てる建物には、住居 (nivesana)、寢室 (sayanighara)、小屋 (uddosita)、望楼 (aṭṭa)、天幕 (māla)、店舗 (āpaṇa)、店屋 (āpaṇsālā)、高樓 (pāsāda)、樓舎 (hammiya)、窟 (guhā)、房舎 (pariveṇa)、倉庫 (koṭṭhaka)、集会所 (upaṭṭhānasālā)、火舎 (aggisālā)、台所 (rasavatī)、便所 (vaccakuṭī)、歩廊 (caṅkama)、歩堂 (caṅkamasālā)、井戸 (udapāna)、井戸舎 (udapānasālā)、暖室 (jantāghara)、暖房舎 (jantāgharasālā)、蓮池 (pokkharāṇī)、仮屋 (maṇḍapa)、庭園 (ārāma)、園地 (ārāmavatthu) があったとされ、都市にさまざまな建物が存在していたことがわかる。また、建造物の材料には、草 (tiṇa)、葉 (paṇṇa)、棒 (kaṭṭha)、材木 (dāru)、泥・粘土 (cikkhalla, mattikā)、漆喰 (sudhā)、煉瓦 (iṭṭhakā)、石 (silā) などがあったという。山崎氏は「庶民の住宅は木造で泥壁・草葺きの小屋、王宮や資産家の住宅は煉瓦・石・木材を使った堅牢な造りであったとみてよかろう」と述べておられる。

次に考古学的に把握できる住居建物の変遷をみてみよう。北インドⅠ期の段階では、バグワンプラ遺跡のハラッパー系文化の住居は日干煉瓦でつくられているが、共存していたPGW文化の住居は円形に柱を並べる掘立柱建物や粘土造りの壁体からなる住居である。壁体には枝組粘土塗りが採用されていたようで、枝の圧痕をとまなう粘土塊が出土している。こうした木造粘土壁の住居はBRW・BSW文化においても同様である⁹⁾。集落全体の調査例がないため、一つの集落にどれくらいの住居が建てられていたのか明らかでないが、集落規模は数棟からなる小規模なものであった可能性が高い。

北インドⅡ・Ⅲ期でも木造住居は一般的であったようだが、Ⅲ期には直線的に柱穴が並ぶ住居址が確認されており¹⁰⁾、平面は方形もしくは矩形に転換しているが住居規模がどの程度であったかは明確ではない。バールフトやサーンチーのストウーパ塔門・欄楯浮彫には2層もしくは3層からなる大型建物が描かれており、これらのストウーパが位置づけられる北インドⅣ期には、木造建物もかなり大型化し、それを可能にする建築技術も著しく発展していたと考えられる。

北インドⅣ期になると、粘土壁に加えて日干煉瓦の使用が部分的に開始され、前1世紀頃には焼成煉瓦が導入される。後1世紀（北インドⅤ期）には、北インド各地で焼成煉瓦の使用が一般化し、煉瓦の法量も規格化される¹¹⁾。しかし、後2世紀ごろには煉瓦の再利用が始まり、北インドⅥ期を通して、細片煉瓦さえもが使用されるようになる。北インドⅥ期末には再利用煉瓦の細片化が著しく、建物の堅固性も著しく低下している。

煉瓦導入後の住居建物の平面形は中庭空間と部屋列の組み合わせによって構成されている。ソーンク遺跡では焼成煉瓦の導入当初からこの平面形態が確立しており、煉瓦導入以前の段階にこうした平面形態がすでに発達していた可能性を示している。ソーンク遺跡の例でみると、中庭には煉瓦敷床面がつくられており、中庭から建物外部へと通じる排水溝が設置されている。また、部屋列には厨房・浴室・貯蔵などそれぞれに機能分化した空間が含まれており、中庭をも含めて、一つの住居内には諸々の生活活動のための機能分化した空間が内包されていたことがわかる¹²⁾。

煉瓦の導入をもたらした要因としては、法量が一定する煉瓦を用いることによって建物規模をある程度規格化することや、大量生産が可能な煉瓦の方が木材よりも調達が可能であったこと、煉瓦の方が耐久性や耐火性に優れていたことなどが想定できる。煉瓦が導入される時期には、北インドの都市の多くがすでに城壁によって囲まれ、都市空間が固定されていたことを勘案すると、その空間利用のあり方と煉瓦の導入がかかわっていた可能性がある。しかし、煉瓦が導入されて大型建物がつくられる時期には、煉瓦の再利用が始まっている。そうした状況は、煉瓦の大量生産を維持する生産・供給体制が充分ではなかった可能性をも示している。

このような住居建物の変遷をみると、ハラッパー文化において採用されていた煉瓦積建物が

なくなり木造住居が採用される段階（北インドⅠ期）、平面が方形もしくは矩形の建物が出現・発展する段階（北インドⅡ～Ⅲ期）、木造建物から煉瓦積建物へと転換する段階（北インドⅣ期末～Ⅵ期）に分けることができる。都市との関連からみると、都市が出現する北インドⅢ期に方形・矩形建物が存在していたことは興味深い現象である。北インドⅠ期の段階では少数の円形住居からなる集落が存在した可能性があるのに対して、集落が大規模化し、都市が出現するようになると方形もしくは矩形に転じている状況は、都市内部における住居の平面配置とかがかわっている可能性が高い。というのは、街路との組み合わせによる、より規則的な平面配置が求められたことが住居の平面形態の変化にかかわっている可能性があると考えられるからである。こうした平面方形もしくは矩形の建物の発展の延長線上に、バールフトやサーンチーの塔門・欄楯浮彫に描かれる木造建物が存在すると考えてよいであろう。

また、煉瓦への転換は、その要因がいかなるものにせよ、住居変遷の過程において重要な画期であったと評価できる。というのは、先にも述べたように、煉瓦の大量生産を可能にする生産体制の確立は、それ以前の木材の調達体制とは大きく異なっており、そうした生産体制の確立そのものが都市の経済システムに基盤を置いていたと想定できるからである。また、中庭と部屋列の組み合わせからなる平面形態は、そこで生活する人々の行為にある程度の規則性が存在したことを示しており、都市における生活様式を反映するものと考えられる。

諸々の生活行為

都市では住居を最小単位として、日々の食生活に関わる行為から物品の売買、儀礼行為など、まさに無数の分野に及ぶ諸々の活動が行われたとえられる。その中でも考古学的に復元できるのは、器物が使用されその痕跡が残される行為である。食生活に関わるものと儀礼に関わるものがとりわけその痕跡を残すと考えられるが、それらとても時期的に行為の内容が変化し、その結果残される物的痕跡も変化していることは想像に難くない。ここでは時期的に変遷を追うことのできる食生活を取り上げてみよう。

食生活に関しては比較的豊富な資料が残されている。大きく分けて調理と食事に関わるものがあるが、変化が明瞭に看取できる土器を取り上げると、北インドⅢ期までの段階では、調理具としては甕のみで、もっぱら煮炊きに用いられている。北インドⅣ期になると食材を炒めるためのフライパン状の器種が加わっている。北インドⅣ期に成立した煮炊きと炒めの組合せは北インドⅣ・Ⅴ期を通して続いており、北インドⅣ期における調理方法の変化と多様化を看取することができよう。

食事に関わるものとしては食器類がある。北インドⅢ期までの段階では皿と鉢を主体とする精製土器が食器類の中心を占めているが、北インドⅣ期になると精製土器の衰退にともなって皿・鉢という器種構成が解体し、土器の食器類としては浅鉢のみになる。食膳形態が大きく変化している可能性が高い。

このように土器の器種構成をみると、北インドIV期に大きく変化している状況が明らかである。土器に表徴される食生活の変化が都市といかに関わっているかその評価は困難であるが、都市化が進行する時期に食生活といった日常生活の基盤をなす行為までも変化していく様子は、当該期に社会・文化が大きく変容していたことを示唆するものであろう。

手工業生産

次に、都市を中心に行われたであろう手工業生産についてみてみよう。

山崎元一氏の研究 [1987 : 174] によると、仏典にみられる工人（職人）には、宝石細工人 (maṇikāra)、象牙細工人 (dantakāra)、金細工人 (suvaṇṇakāra)、銀細工人 (sajjhakāra)、鍛冶工 (kammāra)、鉛工 (sīsakāra)、真鍮工 (vaṭṭakāra)、銅工 (lohakāra)、鉄工 (ayakāra)、錫工 (tipukāra)、陶工 (kumbhakāra)、箭作り (usukāra)、弓作り (dhanukāra, cāpakāra)、弦作り (jīyākāra)、大工 (vaḍḍhaki, tacchaka)、車大工 (rathakāra)、織工 (tantavāya, pesakāra)、紡績工 (suttakāra)、裁縫人 (tunnavāya, cīvaravaḍḍhaka)、洗濯・染色人 (rajaka, raṅgakāra)、皮革工 (cammakāra)、楯作り (cammika)、芦細工人 (naḷakāra)、竹細工人 (veḷukāra, vilivakāra, vena)、花環作り (mālākāra, mālika)、縄作り (rajjukāra)、櫛作り (kocchakāra)、ろくろ工 (cundakāra)、煉瓦大工 (iṭṭhakavaddhaki)、石工 (pāsāṇakoṭṭaka)、絵師・塗工 (cittakāra)、製油人 (telika)、針作り (sūcīkāra)、指輪作り (muddika)、渠工 (nettika)、その他が知られる。都市ではさまざまな製品がつくられ、都市の市場だけでなく、周辺の小規模町邑や村落にも供給されていた可能性が考えられる。

考古資料をみると、北インドII期以降、各種素材で生産される器物が増加する傾向がある。鉄器が導入されるだけでなく、半貴石製やガラス製の玉類の製作も開始される。マヘート遺跡での鉄器製作、半貴石・ガラス製の玉作り工房（北インドIV期）やウツジャン遺跡での玉作り工房（北インドIII期）の存在をみると、これらの器物の製作は都市で集中的に行われていた可能性が高い。

また、その製作場が確認された例はないが、精製土器を中心とする土器もまた、その高度な製作技術を考慮すると、都市で生産が行われていた可能性が指摘できる。特にその製作には専門工人¹³⁾が携わっていた可能性があり、上記の鉄器や玉の製作も含めて、都市がその管理を行っていた可能性が想定できる。

また、土器を除いて、それぞれの原材料は北インドに普遍的に存在するものではなく、北インドの南北を画するヒマラヤ山脈もしくはヴィンディヤ山脈に求められ、原材料の流通・獲得はそれぞれの器物生産にとって重要な意味を持っていたと考えられる。北インドにおける流通機構の実態がどのようなものであったのかは判然としないが、都市がそれら原材料の獲得に主体的に関与していた可能性は充分にあり、原材料の流通過程の復元が、都市の経済機能を理解する手掛りとなることはいうまでもない。

問題はこれらの都市における手工業生産が、都市の発達とどのように関わっていたのかであろう。すなわち特定資源の集中的な管理が、都市が発達する過程で社会の中にどのように位置づけられていたのかということである。釈迦の在世当時に、都市を中心とする商人の活動が活発であり、物流に彼らが積極的に関与していたことが理解できるが、交易を担う商人が都市の成立過程のいずれの段階において成立したのか、また都市成立の前段階において経済が社会システムの中でどのように位置づけられ、機能していたのかという問題がある。都市がその機能の一つとして経済的機能を付与されていたならば、逆に経済的機能の発達が都市形成に及ぼす影響を及ぼしたのかについて、理解を進めていく必要があるだろう。

また、冒頭に示したように、都市に種々の工人が存在していたとすると、分業化と専門工人の成立がいずれの段階において起こったのかが問題となる¹⁴⁾。北インドI期の段階では、集落規模も大きくなく、比較的単純な生活形態あるいは社会・文化システムの存在が想定されるが、そうした社会が都市の成立に向かって複雑化していったならば、その複雑化の過程において諸々の器物に対する需要が社会・文化の中で生み出され、分業化・専門化をともなって器物生産が発展していった可能性が高い。専門工人が社会・文化の中でどのように定位され、社会・文化システムの中で機能したのか、さらには拠点集落や都市の中に組み込まれていったのかが、手工業生産のあり方を考える上で大きな問題となろう。

この点に関連して、諸々の器物が一つの社会・文化システム中に何らかの意味を持って付与され、社会・文化システムの中に埋め込まれていたとするならば、そうした器物生産を都市が集中的に管理する状態は、都市が成立する過程で社会・文化システムの再編が進行した可能性を示唆している。都市が社会・文化システムの形成・維持に関してどのような役割を果たしていたのかという問題は、都市個別の問題ではなく地域社会における社会・文化システム総体とも関連するものであり、その理解の中で手工業生産の様態の解明は大きな意味を持つものと評価できよう。

3 地域における都市

立地

北インドの都市遺跡は、河川の流域に立地する例が大半を占める。前稿 [上杉 1998] においても示したとおり、それは河川交通もしくは河川沿いに発達した交通路と密接に関わるものと推測できる。いずれの遺跡も都市として突如形成されたものではなく、都市成立以前からの居住が認められることから、都市の前段階における中心的集落の形成の段階から河川沿いという立地が重要な意味を持っていたことが理解できる。当該期には北インドは森林に覆われていたと考えられるが、森林地帯において移動あるいは移住の手掛りとして河川が重視されていた可能性が高く、河川沿いでの都市の発達は、北インドの自然環境に規定されたものだったとい

えよう。そこに交通の利便性が加わって、河川沿いの都市の発達が促進されたと考えられる。
集落規模

山崎元一氏による文献史料の検討によると、人が居住する集落としてパーリ語に gāma → nigama → nagara という序列で、規模の異なる集落の存在が知られる [山崎 1987: 157]。これは村→町→都市という概念に対応するものとされるが、パーリ語仏典を中心に検討された山崎氏は、前6～2世紀の時期にこうした集落序列の存在があったと理解されている。このことは、当該時期の段階までに、語彙・概念として集落規模もしくは構造・性格の異なる3つの階梯が人の居住の場としての集落に存在したことを示している。

実際の遺跡の規模については、城壁によって囲まれる都市遺跡以外、遺跡の占有面積を確定するのは困難である。G. Erdosy、M. Lalらは遺物の分布範囲から遺跡規模を計測し、一地域内における集落規模の変異と規模の階梯を検討している [Erdosy 1985a・1995a; Lal 1984]。北インドの都市遺跡の場合、城壁によって囲まれる範囲は150～200haが中心で、パータリプトラの1200haを除くと、おおむね一定している¹⁵⁾。先のErdosyらの成果を参考にすると、一般の集落の規模として5ha未満の遺跡が想定できることから、都市がいかに傑出した規模をもつものであるか理解できよう。発掘調査にもとづいた遺跡規模の推移を復元できる例はないが、都市遺跡といえども相対的に小規模な集落から発展したものと考えるならば、最終的に城壁に囲まれる段階の規模にまで拡大する過程において、諸々の社会的な要因が作用したと考えられる¹⁶⁾。いずれの段階で一般集落から隔絶した面積を占めるようになるのかが明らかにできれば、規模という点から都市発達の過程を復元することができるであろう。

一つの地域の中で、都市が社会・文化的に中心機能を果たしていたであろうことは想像に難しくなく、立地や規模も一つの地域社会のあり方に規定されていると考えられる。加えて、複数の都市・地域を包摂したより広範な地域の構造にも、都市のあり方を決定づける要因が存在していた可能性も高い。

この点に関し、都市から一般集落にいたるまでにいくつの集落階梯が存在し、それらがどれくらいの距離を置きながら存在していたのか、また社会・文化システムの中でそれらがどのようにつながり、一つの有機的な構造体として機能していたのかといった問題が解明される必要がある¹⁷⁾。それらのつながりは、政治的、経済的あるいは宗教的な様態を帯びていたと想像できるが、一つの地域の中における都市の存在あるいは一つの地域を取り巻く社会・文化システムに関する研究は、いまだ出発点にも到っていない。

4 地域間交流と都市

先にも触れたように、手工業生産にかかわって原材料の偏在的分布とその流通が社会・文化システムの中で重要な位置を占めている。また、情報の流通も同様に社会・文化システムの形

成・維持に大きな役割を果たすものと考えられる。そうした物流あるいは情報の流通、すなわち地域間交流の様態が都市形成にとって大きな意味を持つ。

一口に地域間交流といってもさまざまであり、移住・交易・戦争・巡礼など多様な形態を取っていると考えられる。考古学的に明らかにできるのは、物の移動や分布といった現象に限られ、その背景にいかなる地域間交流の形態がともなっているのか逐一明らかにすることは困難であるといわざるを得ない。文献史料には、交易¹⁸⁾ や戦争¹⁹⁾ の存在が記されており、実際それらが社会・文化システムの中で大きな役割を果たしていたと推測できる。また、考古学的には北インドⅠ期以降、共通する物質文化の内容を持った集落が北インド各地に増大しており、そこにはそれまで未開発であった地域に人々が移住していく様子を見ることができるといえる²⁰⁾。

北インドⅠ期に居住が開始された遺跡では基本的にその後も時期的に断絶することなく人の居住が展開し、その時々を文化的要素を取り込んでいることから、新たな集落地の開発以降も本来の居住地との接触・交渉を絶つことはなかったと考えられる。したがって、移住先は本来存在した社会・文化システムの中に取り込まれ、社会・文化システムの維持において末端組織として機能していたと推定できる。このように考えると、開発と集落の拡大は当該期の社会の全体的傾向であり、物資・情報流通の範囲の拡大を基本的性格としていたことが理解できる。すなわち、地域間交流の活発化が開発・集落拡散を促す要因となっていたと考えられよう。

先述の特定資源の開発とその流通は、こうした地域間交流の活発化から生み出されてきたものと思われる。集落の拡散にともなって特定資源の分布が認識され、社会・文化システムの中で価値を見出されたがゆえに交易の対象となり、その管理が重要視されるにいたったのであろう。戦争もまた、一面ではそうした特定資源の獲得を目指す社会的行為であった〔都出・田中編1998〕。

このように、地域間交流が活発化する中で物流・情報流通の中心として拠点集落の形成が促進され、その機能が極大化したところに都市の形成が起こったと理解したい。したがって、拠点集落形成の当初からそれぞれは単独で存在したのではなく、それぞれの拠点集落が相互に結びつくかたちで地域のあり方が決定されていたものと考えられる。

では、なぜ当該期の社会において集落の拡散や物資・情報の流通を促進する社会的志向性が生まれてきたのであろうか。この点に関してはまったく不明といわざるを得ない。北インド都市文化以前の段階において、北インド各地に存在した諸文化は概して狭域にとどまるものであり、北インド都市文化の段階とは対照的である。まったく異なる社会・文化の存立原理がもたらされたと考えられるが、その一端はインド・アーリヤ語族の移住と関連している蓋然性が高い。しかし、すべてが彼らに帰せられるわけではなく、前2千年紀後半の段階には、インド・アーリヤ語族の来入も含めて、社会・文化集団の拡散が促進される状況が存在したと考えておきたい。しかしその実態の解明は、今後の重要な課題である。

5 都市を取り巻く社会的背景

最後に北インドの都市を取り巻く社会的背景について、以上述べてきたことを踏まえてまとめておきたい。

まず、考古学的に把握される諸点から当該期の集団について考えてみよう。ある器物の分布範囲を一つの需要のもとに生産・供給システムを共有する社会・文化的範囲であると定義すると、それは一つの社会・文化的志向性によって維持される社会・文化集団であると置き換えることができる。それは民族的な集団とは定義概念のレベルを達するものであり、民族集団との一対一の対応を許すものではない。むしろ一つの社会がさまざまなレベルで分節される社会集団によって構成されるものであると考えれば、器物の分布によってまとめられる集団は、そうした社会の一断面を示すものと理解できる。

ここで器物の分布によって区分される集団には、北インドⅠ～Ⅲ期にあらわれる精製土器の分布の違いによってまとめられる集団が存在することがわかる。すなわち、PGWを主体的に使用する集団とBRW・BSW（北インドⅡ期）・NBPW（北インドⅢ期）を主体的に使用する集団の2つである。この時期には赤色系軟質土器やその他の器物においては北インド各地において共通性が認められ、精製土器においてのみ違いが認められることから、精製土器に対して当該期の集団が与えていた意味は、他の器物と異なっていたと考えられ、その差異の維持には異なる2つの情報の流通・生産・供給システムが存在したことが推定できることから、これらを器物に対して明確な志向性を表現しその維持を図った2つの集団として定位できる。

こうした集団の特質は、物質文化の均質化をはかるべく情報の流通を恒常的に行っている点である。例えば、北インドⅡ期にBRW・BSWを製作・使用していた集団は北インドⅢ期にNBPWを創出するが、NBPWはBRW・BSWが分布していた地域に齊一的に導入されており、NBPWに関する情報を即座に共有させるだけのシステムを有していたと考えられる。

また、北インドⅡ・Ⅲ期には、多数の部族や十六大国に分かれていたにもかかわらず、器物に関しては、部族や国家に縛られることなく、より広範な単位で情報の共有を行っている。これがどのような意味を持つのか、その解釈は今後の検討に委ねたいが、部族や国家の間をつなぐ情報の伝達・共有システムが存在していたことは、当該期の社会のあり方を考える上で重要であろう。おそらくそれは、拠点集落や都市を通して部族・国家の範囲を超えて存在していたと考えられる。

先にも述べたように、注目されるのは、これらの集団が拡大志向を有していたことであろう。それは北インドの都市文化が拡大志向を有していたというAllchinの指摘〔Allchin, ed. 1995; Allchin, B. & R. 1997〕と同じ意味においてのことである。部族国家から十六大国、マウリヤ朝へといたる道程は、まさに北インド内部における拡大志向とそれにとまらぬ統合志向に基盤を置くものであるが、物質文化の側面においてもそれは同様である。したがって、北イ

ンド社会の拡大・統合志向は単に政治的な統合ではなく、社会・文化全体の志向性であったと理解してよからう。交易の発達や戦争はそうした拡大志向の現象的側面として位置づけられる。

拡大・膨張志向のもとでの拡散は、自集団の文化的帰属性に対する意識を高揚させることにつながったと考えられ、先述の専門工人の存否の問題も含めて、そうした帰属的紐帯意識が特定の精製土器の製作・使用に現出したと推測される。この帰属意識を基盤とする地域間交流は地域統合へとつながり、総体としての社会・文化集団の拡大をもたらすことになった可能性が高い。

社会・文化集団への帰属意識は、地域空間の領域化をもたらしたと考えられる。先述のように、北インドII期以降、鉄生産や貴石を原料とする玉生産あるいはガラス生産などの手工業生産が展開していくが、それらの生産に供給される特定資源の地理的偏在性は、地域空間の領域化の過程で明確に意識されていくことになったと推定される。その間の事由については判然としないが、一つに特定稀少資源への近接性を組み込んだ地域空間の領域化は、明確な領域意識へと結実した可能性が高い。PGWがヒマラーヤ山脈の溪谷中に及んで出土していることは、ヒマラーヤ山脈中の豊富な木材資源の利用と関連しているといわれるが、集落の拡散が地理的に一体性が強い北インド平原部だけでなく、地理的に異なる地域にまで及んでいることは、特定資源の開発が領域として文化的に認識される空間の拡大と関係している可能性を示唆している。

このような広域に及ぶ領域意識の形成・強化は、当初日常生活の場として存在したはずの集落を、社会・文化集団が保有する領域空間の一部として埋め込んでいくことにつながり、総体として生活領域から文化・社会領域へと人々の空間認識を転換させていく状況を想定させる。ここに及んで、地域空間は、日常生活空間としての集落の水平的広がりとしての等質空間から、それぞれに異なる地理的環境および異なる特定資源への近接性を内包する社会・文化的に構造化された空間へと変貌していった可能性を示す。

都市を地域間交流・地域統合の結節点としてみなし、物資・情報の集約点ととらえるならば、領域意識の形成・強化の過程で都市はその領域意識を維持する役割を果たした可能性が高い。さらに都市が、食料を中心とする生産活動に従事する一般村落とは異なり、文化・社会領域としての存在を強調する傾向を有することを認めるならば、生活領域から乖離していく領域空間の凝縮として都市が存在したという仮説的見解を導き出すことができよう。

大規模面積を擁する都市の形成が指定される北インドIII期を一つの到達点として、北インドI期以降、北インド社会は地域間交流・地域統合を軸として展開してきたと考えられるが、領域化の進行と領域意識の形成、さらに領域意識との関連のもとでの都市の形成過程の詳細については、具体的資料の検討および論理的仮説構築によって今後も追及されなければならない。現状で指摘しうるのは、考古学的には北インドI期以降に居住地の拡大と地域間交流・地域統合が存在したこと、そして北インドIII期に相当する前6・5世紀には文献史料において都市と国家の存在が確実視されること、の2点である。都市と国家の形成が地域間交流・地域統合を

基盤とする都市化という社会変革の一断面であるとするならば、その本質は社会と地域間交流・地域統合の関係に見出されるであろうことを予測しておきたい。

また、拡大・統合志向は、開放型の社会の形成を意味する。ある一定の生態系の中で自足的に生活する場合、遠隔地から資源の調達を行うことはあっても、広範な地域を社会・文化的に統合しようという状況は認められない。北インドでいえば、前2千年紀前半にガンジス中・下流域に展開した新石器文化がその代表である。また、拡大志向を有さない狭域文化としては、ガンジス中・下流域新石器文化と同時期のインダス文明の文化要素を引きながらも狭域文化にとどまった後期ハラッパー文化や、それとの関係も指摘されるOCP文化などが含まれるであろう。これらの文化は閉鎖型とも評価でき、開放型の北インド都市文化とは大きく異なっている。

開放型社会の形成要因については先述のとおりであるが、この開放型の社会・文化形態の形成こそが、北インドの都市文化の形成に決定的な影響を及ぼしている。鉄器の導入による森林地の伐採効率の向上もその一因となっているであろうが、重視すべきはそうした志向性を有する社会・文化の存在そのものであり、北インド都市文化期の社会・文化の最大の特質の一つに数えてよいであろう。

6 おわりに

以上、都市形成を可能にした北インドの都市化について諸々の視点から検討を加えてきた。ここで指摘した問題の諸点を明らかにできるならば、北インドの都市文化の理解に一步でも近づくことができよう。調査数はきわめて限られており、その成果が公表される事例も多いとはいえないが、現有資料の解釈の方向性の一つとして理解していただければ幸いである。

本稿は、インド考古研究会第15回サマーセミナーにおいて発表した内容を改めたものである。発表の席上において、参加者の方々から多くの貴重なご意見を頂戴した。また、本稿の作成にあたっては、網干善教・小西正捷・近藤英夫・山崎元一各先生よりご指導賜りました。ここに記して深謝いたします。

註

- 1) 精製土器の変遷をもとにすると、前2千年紀後半以降、後1千年紀中葉までを、以下の6段階に区分することができる (PGW 前期・BRW 前期併行段階、PGW 後期・BRW 後期併行段階、PGW 後期・NBPW 前期併行段階、NBPW 後期段階、クシャーン朝期併行段階、グプタ朝期併行段階)。これらを北インドの物質文化変遷の時期区分の指標とし、さらに土器の展開を北インド都市文化の成立過程の一端を示すものとして定位すると、これらの時期区分を北インド都市文化時期区分として設定することが可能と考える。詳細は別稿において準備している。なお、略号については第1表を参照のこと。
- 2) 同じく山崎元一氏の研究 [1987: 162] によると、四門の付近と大道の交差する中央広場では食料品や花、薪などが売られ、さらに市内は象牙細工人街 (dantakāravīthi)、洗濯屋街 (rajakavīthi)、料理人街 (odanikagharavīthi)、ヴァイシャ街 (vessavīthi) など、職業・階層によって街区が分かれていたという。
- 3) 山崎元一氏の研究 [1987: 175] によると、都市に存在したサービス業には以下の種類が文献史料に知られる。俳優・舞踊者 (naṭa, naṭaka, naccaka)、舞妓 (lāsikā)、音楽師 (gandhabba)、歌手 (gāyaka)、

大鼓打ち (bherivādaka)、手鈴楽師 (pāṇissarika)、陶鼓打ち (kumbhathūṇika)、螺貝吹手 (saṅkhadhamaka)、即興詩人 (ganthika)、占星師・占相師 (nemittika, ikkhanika)、蛇使い (ahiguṇṭhika)、軽業師 (laṅghaka)、アクロバット (jalla)、道化師 (sobhiya)、漫才師 (sokajjhāyin)、手品師 (indajālīka)、魔法使い (vetālīka)、幻術師 (māyākāra)、拳闘家 (mutṭhika)、力士 (malla)、理髪師 (kappaka, nahāpita)、浴僕 (nahāpaka)、料理人 (sūda, odanika, ālārika, sūpika, bhattakāraka)、荷運び (bhārahāra)、水運び (udahāra, pāṇiyahāraka, kumbhadāsī)、火葬夫 (chavaḍāhaka)、清掃人 (pupphachaddaka)、被傭人 (bhataka)、労働者 (kammakāra)、召使・下僕 (pessika, upatṭhāka, pādāmūlika)、奴隷 (dāsa)、娼婦・遊女 (gaṇikā, vesī, vaṇṇadāsī)、園丁 (ārāmapāla, uyyānapāla)、馭者 (sārathi)、車夫 (sākatika)、船頭 (nāvika)、船乗り (niyyāmaka)、医師 (vejja)、外科医 (sallakatta)、算術家 (gaṇaka)、その他。

- 4) 『アルタシャーストラ』が言及する都市は、辺境に建設されるべき戦闘用の城砦都市であり、その記載がどこまで一般の都市を意識したものか、判然としない。しかし、少なくとも理念型として、都市設計は一般の都市にも適用されるべきものであった可能性が高い。
- 5) 東インド・オリッサ州にあするシシュパールガル遺跡の城壁は四辺に2カ所ずつ城門を設けた正方形を呈しており [Lal 1949]、平面設計に対する明確な意識を看取できる。この遺跡では、発掘調査によって城壁の造営年代は前2世紀に措定されており、北インドの諸遺跡と時期的には大きく乖離しないが、この遺跡における都市形成にどの程度北インド型の都市の諸要素が反映されているのか、すなわち同遺跡が北インドから大きく離れた位置にあることと、都市形成過程における文化的・歴史的脈絡も北インドのそれとは異なっていた可能性があることなどを考慮すると、このようなきわめて整然とした都市設計が直接北インドに由来するものかどうかは断じ得ない [上杉 1998a]。
- 6) カウティリヤ『アルタシャーストラ』によると、城壁は幅12ダンダ (1ダンダは約6フィート)、高さ6ダンダの土台をつくり、その上に煉瓦積あるいは石積の胸壁を築く必要性を説く。土台の頂部は平坦で、側面は壺のようにふくらみ、荆棘の茂みや有毒の蔓草が生い茂る。また土台を構築するには、象や牛が利用されるという [上村 1984]。
- 7) シシュパールガル遺跡の場合では、低平な台形の上に法面を設けてさらに台形の2段目を築造している。この例では、城壁の平面形態と同様に、北インド諸例よりも明確な設計意識が働いていると考えられる。しかし、この遺跡においても最終的には断面形が裾広がり of 蒲錐形に転じているようである。
- 8) 当初、この城壁の造営は発掘調査を行った G.R. Sharma によって前2千年紀末に措定され、その後の積み足し・改修を経て発掘調査で検出されたような現況になったと解されたが、その後、この城壁とされた施設の年代観に対する疑問が多数の学者によって提示され、どれだけさかのぼらせて考えてもこの施設の造営は前6世紀よりも古くなることはないという解釈が一般的になっている。
- 9) こうした木造住居の起源については現状では判然としないが、後期ハラッパー文化では煉瓦の使用が一般的であることから、少なくとも西方に起源する住居構造ではないことが明らかである。むしろガンジス川流域のように木材が豊富な地域に起源するものと理解するのが妥当であろう。実際、ガンジス中・下流域に展開した新石器文化段階の遺跡では、柱穴の検出例こそないものの、木枝組粘土塗塊の一部が出土しており、少なくとも木造住居が存在した可能性は高い。その系譜関係は別にしても、北インドの木材が豊富な地域では、伝統的に木造住居が一般的であったと考えてよいであろう。その点で、PGW系集落における木造住居が東方に由来するものであった可能性は、PGW系集団が置かれた社会的・文化的脈絡を考察する上で興味深い。
- 10) マトゥラー遺跡では柱穴列の平面形については判然としないが、ジャーケラー遺跡では矩形に柱穴列が検出されており、平面矩形の建物構造が推定される。
- 11) サヘート遺跡B地区の例によると、I期 (北インドIV期末) の煉瓦法量は $(46.0 \sim 47.0) \times (26.0 \sim 27.0) \times (7.50 \sim 8.50)$ cm や $52.0 \times 24.0 \times (10.0 \sim 12.0)$ cm、II期 (北インドV期) には $(30.0 \sim 35.0) \times (21.0 \sim 23.50) \times (4.50 \sim 5.0)$ cm を測る [網干・藺田編 1997]。概して、I期の煉瓦は個

体によって法量の差異が大きいものに対して、II期には法量のばらつきが収斂される傾向にある。

- 12) 部屋空間内には炉・大形甕・貯蔵施設を設ける例や、煉瓦敷床面・排水溝・煉瓦組遺構を伴う浴室に推定される部屋空間を建物の西南隅に配置する例もみられる。同様に西南隅の空間に井戸を設置する例が認められる。
- 13) 専門工人の存否は手工業生産のあり方を考える上で重要である。すなわち、それは社会が手工業生産をいかに組織していたかにかかわる問題である。特に、社会によって存在意義が重視される器物に関しては権力による生産管理が想定でき、拠点集落あるいは都市に集中する可能性が考えられる。精製土器に関していえば、北インドI期には専門工人が成立していた可能性が高いが、手工業生産全体からみると、北インドII期以降にその重要性は増大していたと考えられる。鉄器や玉類は生産管理の対象となっていた可能性が高く、専門工人の組織化が行われていたと推定される。都市における集約的な生産の場の存在は、専門工人を擁した組織的な器物生産の存在を示唆している。
- 14) いずれの段階で専門工人が成立していたのか現在の資料からでは断定できないが、北インドI期に精製土器が出現した段階で、すでに精製土器製作にかかわる専門工人が形成されていた可能性がある。精製土器がもつ器種・器形における一貫性、製作技法・焼成技術の安定性、外観の特殊性、精製土器の分布にみる広域性などの諸点は、専門工人の存在を強く示唆するものである。
- 15) G. Erdosy [1987] によって推定されている都市面積は最小例は、ガンジス中流域のピータ遺跡で14ha、最大例はガンジス中・下流域のパータリプトラで1200ha以上である。また、50ha以下のものにはハスティナープラー(30ha)、ラージガート(40ha)、ティラウラーコート(20ha)、タキシラー・シルカップ(46ha)がある。さらに、50ha以上100ha以下のものには、ラージギル新城(64ha)、タキシラー・ビルマウンド(70ha)が加えられる。
- 16) Erdosyは、ガンジス川中流域に位置するアッラーハーバード県カウシャーンピー周辺での踏査成果にもとづいて、北インドII期の段階に2段階、北インドIII期の段階に4段階、北インドIV期の段階に5段階に及ぶ集落規模の分化を指摘している [Erdosy 1995a]。
- 17) Erdosyは北インドII期における2階梯の集落規模の分化は首長制社会における特徴であると述べ、鉄鉱石や貴石などの特定資源の地域的偏在性に起因する資源の確保が首長制社会では重要視されたとしている。この点については集落規模のみからの断定は不可能で、より包括的な議論が必要とされよう。
- 18) 文献史料には、ヴァーニジャ(vāṇija, Skt., vanij)と呼ばれる商人がいて、さまざまな商業活動に従事しており、中にはガハパティ(gahapati, gahapatika, Skt., grhapati)やセッティ(setṭhi)あるいはシュレーシュティ(śreṣṭhin)と呼ばれる富豪・豪商階層が形成されていたという [山崎1987: 181f.f.]。また、山崎元一氏の研究によると、仏典中にみられる都市の商人の種類には、衣服商(dussika, pāvārika)、穀物商(dhaññāvāṇijaka)、酒商(pānāgārika, majjika)、陶器商(āmatikā, pattavāṇija)、両替商(heraññika)、真珠商(muttika)、香商(gandhika)、花商(puppha-āpanika)、青物商(paṇṇika)、根菜商(mūlika)、果物商(phalika)、パン商(sattu-āpanika)、菓子商(pūvika)、魚商(macchika)、肉商(mamsika)、馬商(assavāṇija)、刈草売り(ṭiṇahāraka)、薪木売り(kaṭṭhahāraka)、その他が存在したという [山崎1987: 174]。
- 19) 北インドの場合においても、『マハーバーラタ』にみる部族間の戦争が都市形成過程の前半段階に位置づけられ、その間の関係については判然としませんが、前6・5世紀には十六大国と呼ばれた国家群が北西インドから北インド、中央インドにかけて成立していた。十六大国は最終的にマウリヤ朝マガダ国によって一つに統一されることになるが、その統一過程には戦争をともなう征服行為があり、国家形成過程あるいは統一・発展過程において戦争が果たした役割は大きいといえる。また、十六大国以降マウリヤ朝にいたる過程で、官僚制の発達に並んで、歩兵・車兵・騎兵・象兵から構成される常備軍が成立しており、戦争行為が高度に組織化されたものであったことを示している。
- 20) 人間の行為の総体の中で地域間交流には、その規模・程度・性格のさまざまな点において、多様な形態が存在していると考えられるが、移動技術および移動形態は、地域間交流の様相を決定する上

において大きな要因として働くものと想定できる。移動技術・移動形態とは、具体的に示せば、移動の時間的・空間的広がり（移動の継続性あるいは断絶性、移動距離など）、移動に用いられる交通路（具体的には陸路や河川路あるいは海洋路、さらには自然地形による交通路の特定性など）、移動の手段（徒歩・車・船など）によって規定されるであろう。また、移動の方向性も移動形態を決定する上で大きな要因となろう。

引用・参考文献

- 網干善教・藺田香融（編） 1997『祇園精舎 サヘート遺跡発掘調査報告書』関西大学。
網干善教・高橋隆博（編） 2000『マヘート遺跡発掘調査概報』関西大学考古学研究室。
岩本裕 1970「アールヤ世界とガンジス古代諸国家」（荒松雄ほか編）『岩波講座世界歴史』3、岩波書店、東京：209-248。
植木武 1996a「初期国家の理論」（植木武編）『国家の形成 人類学・考古学からのアプローチ』三一書房、東京：9-39。
植木武 1996b「闘争・戦争モデル」（植木武編）『国家の形成 人類学・考古学からのアプローチ』三一書房、東京：129-167。
上杉彰紀 1994「紀元前1千年紀の北インドにおける土器の変遷」『インド考古研究』第16号：5-20。
上杉彰紀 1997「人物土偶のまとめ」（網干善教・藺田香融編）『祇園精舎 サヘート遺跡発掘調査報告書』：1033-1061。
上杉彰紀 1997b「北インドにおける精製土器—彩文灰色土器と黒緑赤色土器を中心に」『インド考古研究』第18号：52-90。
上杉彰紀 1997c「北インド・初期歴史時代における土器の変遷」『インド考古研究』第18号：117-119。
上杉彰紀 1997d「北インド・初期歴史時代における土偶の変遷」『インド考古研究』第18号：143-150。
上杉彰紀 1998a「初期歴史時代・鉄器時代における北インドの都市」『インド考古研究』第19号：25-50。
上杉彰紀 1998b「北インドにおける煉瓦積建物の変遷」『網干善教先生古稀記念考古学論集』：1553-1574。
上杉彰紀 1999a「古代インドの都市と社会 考古学的知見を中心に」『季刊文化遺産』Vol.7：13-17。
上杉彰紀 1999b「紀元前後の北インドにおける土器の様相—サヘート遺跡出土資料の検討を中心に—」『インド考古研究』第20号：15-62。
大谷宏治 1997「建築用材」（網干善教・藺田香融編）『祇園精舎 サヘート遺跡発掘調査報告書』：1184-1246。
大谷宏治 1998「古代インドの建築用材—研究の現状と課題」『インド考古研究』第19号：51-62。
上村勝彦 1984『カウティリヤ 実利論—古代インドの帝王学』上・下、岩波書店、東京。
小西正捷 1970「インダス文明とアールヤ世界の背景」（荒松雄ほか編）『岩波講座世界歴史』3、岩波書店、東京：171-208。
小西正捷 1971「東部パンジャブにおける後期ハラッパー文化」『物質文化』17号：41-52。
小西正捷・近藤英夫 1996「南アジア "暗黒の時代" の解明」（安田喜憲・林俊雄編）『講座文明と環境5 地球と文明の画期』朝倉書店、東京：112-126。
近藤英夫 1992「南アジア稲作農耕の考古学的展望」『東海大学紀要 文学部』第57輯：67-82。
佐々木憲一 1999「日本考古学における古代国家論」（大阪大学考古学研究室編）『国家形成期の考古学』：29-54。
杉本卓洲 1984『インド仏塔の研究 仏塔崇拜の生成と基盤』平楽寺書店、京都。
都出比呂志・田中琢（編） 1998『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館、東京。
西村正雄 1996「長距離交易モデル」（植木武編）『国家の形成 人類学・考古学からのアプローチ』三一書房、東京：169-231。
藤原達也 1999「初期インド派美術に見られる古代インド建築」『季刊文化遺産』Vol.7：18-22。
山崎元一 1980「ハスティナープラとアトランジケーラー」『國學院雑誌』81-12：48-64。
山崎元一 1987『古代インド社会の研究 社会の構造と庶民・下層民』刀水書房、東京。
山崎元一 1994『古代インドの王権と宗教 王とバラモン』刀水書房、東京。
Aboshi, Y., K. Sonoda, F. Yoneda & A. Uesugi, in press, Excavations at Saheth Maheth. *East & West*, Vol. 49.
Allchin, F.R. 1989 City and State Formation in Early Historic South Asia. *South Asian Studies*, 5: 1-16.
Allchin, F.R.(ed.) 1995 *The Archaeology of Early Historic South Asia: The Emergence of Cities and States*. Cambridge University Press, Cambridge.

- Allchin, B. & F. 1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Allchin, B. & F. 1997 *Origins of a Civilization The Prehistory and Early Archaeology of South Asia*. Viking, New Delhi.
- Chakrabarti, D.K. 1976 The Beginning of Iron in India. *Antiquity*, 50: 114-124.
- Chakrabarti, D.K. 1992 *The Early Use of Iron in India*. Oxford University Press, Delhi.
- Chakrabarti, D.K. 1995 *The Archaeology of Ancient Indian Cities*. Oxford University Press, Delhi.
- Earle, T.(ed.)1991 *Chiefdoms: Power, Economy, and Ideology*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Earle, T. 1991 The Evolution of Chiefdoms. in (Earle ed. 1991:1-15).
- Erdosy, G. 1985 Settlement Archaeology of the Kausambi Region. *Man & Environment*, IX: 61-80.
- Erdosy, G., 1985, The Origin of Cities in the Ganges Valley. *Journal of Economic and Social History of Orient*, Vol.XXVIII-Pt. I: 81-109.
- Erdosy, G. 1987 Early Historic Cities of Northern India. *South Asian Studies*, 3: 1-23.
- Erdosy, G. 1995a The Prelude to Urbanization: ethnicity and the rise of Late Vedic chiefdoms. in [Allchin ed. 1995]: 75-98.
- Erdosy, G. 1995b City States of North India and Pakistan at the time of the Buddha. in [Allchin ed. 1995]: 99-122.
- Hartel, H. 1993 *Excavations at Sonkh: 2500 years of a town in Mathura District*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin.
- Kristiansen, K. 1991 Chiefdoms, States and Systems of Social Evolution. in [Earle ed. 1991]: 16-43.
- Lahiri, N. 1992 *The Archaeology of Indian Trade Routes (upto c. 200 BC)*. Oxford University Press, New Delhi.
- Lal, B.B. 1949 Sisupargarh 1948: an Early Historical Fort In Eastern India. *Ancient India*, no.5: 62-105, ASI, New Delhi.
- Lal, B.B. 1954 Excavation at Hastinapura and Other Explorations in the Upper Ganga and Sutlej Basins 1950-52. *Ancient India*, nos.10-11: 5-151, ASI, New Delhi.
- Lal, B.B. 1992 The Painted Grey Ware Culture of the Iron Age. in Dani & Masson ed. *History of Civilization of Central Asia* vol.1, UNESCO: 421-440.
- Lal, B.B. 1993 *Excavations at Śringaverapura (1977-86)*, vol.1. Memoirs of the Archaeological Survey of India, 88, ASI, New Delhi.
- Lal, M. 1984 *Settlement History and Rise of Civilisation in Ganga-Yamuna Doab from 1500 B.C. - 300 A.D.* B.R.Publishing Corporation, Delhi.
- Lal, M. 1986 Iron Tools, Forest Clearance and Urbanisation In the Gangetic Plains. *Man & Environment*, 10: 83-90.
- Marshall, J.H. 1951 *Taxila: an illustrated account of archaeological excavations carried out at Taxila under the orders of the Government of India between the years 1913 and 1934*, 3 vols. Cambridge University Press, London.
- Meadow, R. 1996 The Origins and Spread of Agriculture and Pastoralism in Northwestern South Asia. in D.R. Harris ed. *The Origins and Spread of Agriculture and Pastoralism in Eurasia*. UCL Press: 390-412.
- Roy, T.N. 1983 *The Ganges Civilization: A Critical Archaeological Study of the Painted Grey Ware and Northern Black Polished Ware Periods of the Ganga Plains of India*. Ramanand Vidya Bhawan, New Delhi.
- Roy, T.N. 1986 *A Study of Northern Black Polished Ware Culture. An Iron Age Culture of India*. Ramanand Vidya Bhawan, New Delhi.
- Sharma, G.R. 1960 *The Excavations at Kausambi (1957-59)*. The Department of Ancient History, Culture and Archaeology, University of Allahabad, Allahabad.
- Sharma, G.R. 1969 *Excavations at Kausambi 1949-50*. Memoirs of the Archaeological Survey of India, no.74, ASI, Delhi.
- Sinha, K.K. 1967 *Excavations at Śrāvastī 1959*. Banaras Hindu University, Varanasi.
- Uesugi, A. In press Re-evaluation of the Pottery Sequence in North India during the 1st Millennium BC. *Felicitation Volume for Dr. Jagat Pati Joshi*. ASI.
- Verardi, G. 1992 *Excavations at Harigaon, Kathmandu*. IsMEO, Rome.
- Verardi, G. 1998 Excavations at Gothihawa: a note on the results obtained during the first excavation campaign in winter 1994-95. *Ancient Nepal*, 140: 85-105.